

文 ベルナデッタ・ジルベルト

溶岩に恋をして

写真家のオリビエ・グリュネバルトが、30年間、
持てる情熱のすべてを注いできた、火山。
地球が形成される過程で見られたであろう光景を、
彼はとらえようとしている。





【前見開きページ】
タンザニアのオールドイニョ・レンガイ火山は、「カーボナタイト」と呼ばれる二酸化炭素を豊富に含む溶岩を噴き上げる、世界で唯一の火山だ。溶岩は、液体の状態では黒色だが、冷えて固まると白色になる。
【当見開きページ】
オリビエ・グリュネバルト(右)は、硫黄採掘労働者たちが働く現場に30日近く泊まり込み、インドネシアのイジェン山の火口で揺らめく青い炎の撮影に成功した(左)。



黒々と炭化した樹幹が、漆黒の空に向かって屹立している。火山の頂にある森は、なす術もなく、有毒な噴気をはらんで斜面を吹き飛ばす突風の攻撃を受ける。ヘッドランプの光の先で、灼熱した小石が異様な光を放っている。それは、採掘労働者たちが来る日も来る日も背負い続ける籠からこぼれ落ちる、小さな岩石のかたまりだ。狭い雨裂が開けた場所で、突然、風向きが変わり、火口全体が姿をあらわす。暈のかかった月の光の下で、碧色の酸性湖が揺らめく。

視線を転じると、鮮やかなアイスブルーの炎が燃え立っている。硫黄の斜面で踊り、地を舐め、飛びすさぶ火山性ガスの巨大な炎は、高さ5メートルにもなる。それは、夜の闇のなかでしか、見ることができない。斜面の底のほうで、噴気が繰り返し、くぐもった咆哮を響かせる。有毒な火山ガスに包まれながら、インドネシアのイジェン火山で硫黄を採掘する鉱夫たちを、たいまつのようなオレンジ色の光が照らしている。融けた硫黄が冷えて固まった貴重な鉱物を採取するため、彼らは黙々と働く。

オリビエと私は、地球創造を連想させるこうした光景それ自体を、その壮大さ、激しさ、美しさによって喚起される感動を、そして、むき出しの自然が見せる荒々しさを求めて、かたや写真家、かたやジャーナリストとして、30年以上にわたって、この地球を旅してきた。



(左) 1983年から噴火が続く
ハワイ島のキラウエア火山では、
今も溶岩が流れ続けている。
溶岩はトンネルのなかを流れ、
海面に爪を立てる。
(右) キラウエアに
比べると規模は小さいが、
バプアニューギニアの
ニューブリテン島にそびえる
タブルブル火山でも、
視覚と聴覚で壮大な
火山活動を体験できる。



を見下ろす標高約3350メートルの荒ぶる巨人、エトナ火山のことだ。姿かたち、色、動きを常に変えながら流れていく、灼熱した溶岩のとてもない迫力を目の当たりにしたのは、私たちふたりとも、その時が初めてだった。

それ以来、オリビエは、火山の世界を探究し続け、溶岩流の目くるめくスリルを体験することに専念している。

「火山に登るようになって、地球のどこかで突発的な事象が発生したというニュースを聞きつけると、どこへでも駆けつけるマニアのコミュニティがあるということを知り初めて知った」と、オリビエは言う。「今となっては、僕もその一員。世界各地の火山観測所が発表する情報や、専門家のウェブサイトを、天気予報にかじりついて、地球の活動を見張っているのです。彼らと一緒に、火山との付き合い方、リスクを低くする方法、対処する方法を学んだ。僕は危険を追い求めたりしない。自然現象の迫力や美しさに夢中なのです」。リスクの評価は、常に慎重に行っている。主に問題となるのは、火山活動よりむしろ地形の複雑さや近寄りやすさに起因することが多い。「装備は当然、火山灰の熱に耐えうるものでなければならぬけれど、山では、単なる技術的な問題以上に、制約を受けることが多いのです。睡眠不足のまま重い荷物を担いで、予期しないことが次々と

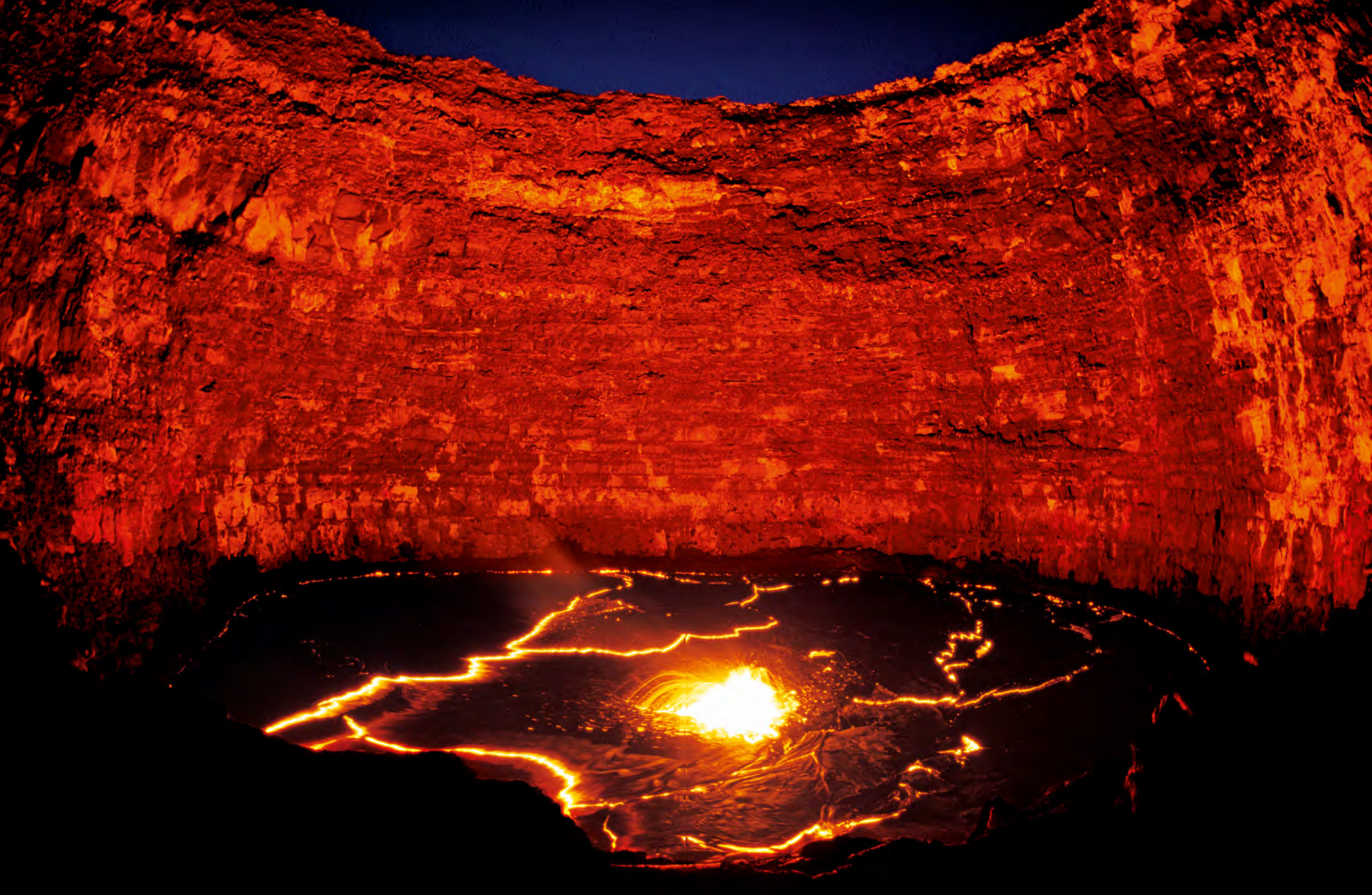
起こる険しい地形のなかを進んで行かなければならないのですから」。

装備の運搬は、特に綿密に準備される。2011年に、コンゴ民主共和国のニラゴongo山に登頂した際には、100人のポーターを手配した。負傷者が出た場合の搬送も慎重に考慮されるが、情熱を持った火山観測者が実際に事故に遭うことは、めったにない。オリビエは、ロシアのカムチャツカで最悪の状況を経験したが、原因は火山の噴火ではなく、寒さだった。マイナス20度から30度の極寒のなかで11日間も野営を余儀なくされ、片足が凍りついてしまった。こうしたことは、通常、火山では予測されないことだ。

「作業を急いで迅速に離れる。だが、安全を犠牲にするな」というのが、オリビエの信条だ。彼は火山で、決してひとりにならない。撮影に集中している間、万一に備えて、危険を察知し、警告してくれるチームメイトに囲まれていなければならぬことを、彼は承知している。

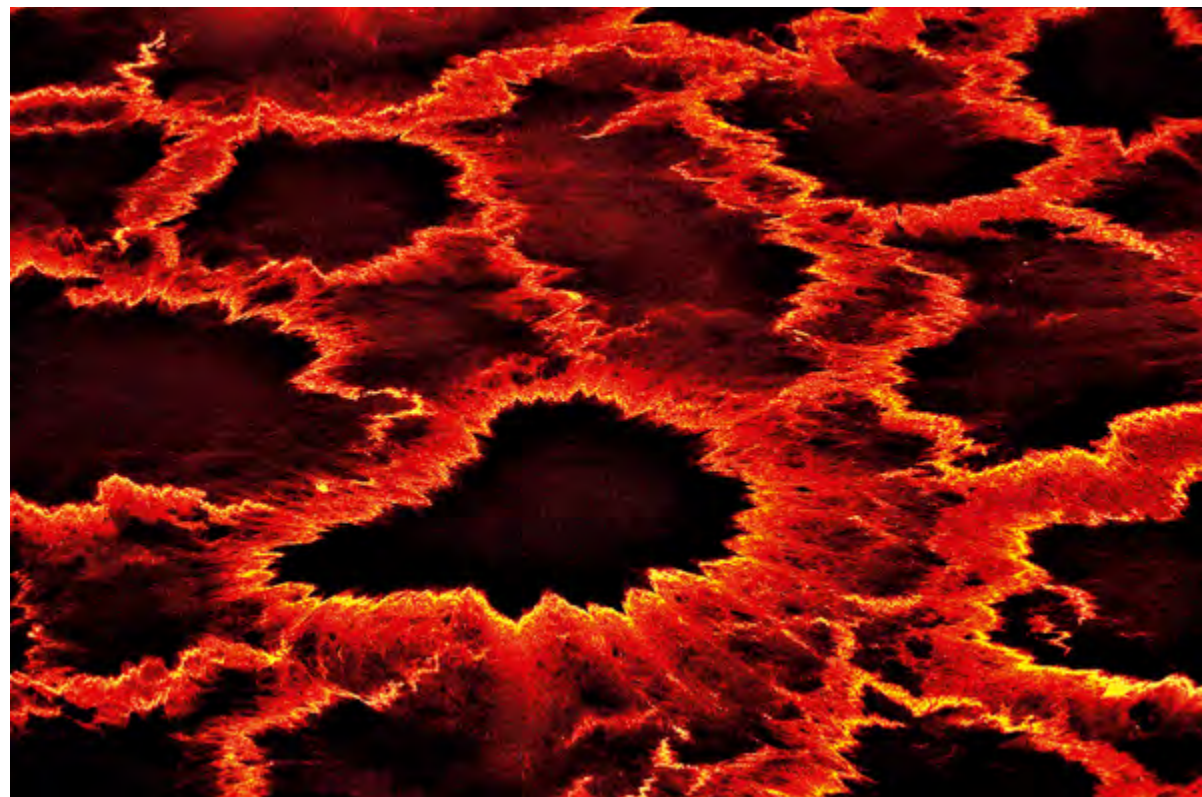
世界に約1500ある活火山のうち、およそ20から30の山が噴火している。初め

僕は危険を追い求めたりしない。
自然現象の迫力や美しさに夢中なのです。





〔前見聞きページ〕
エチオピアのアファール地方にあるエルタ・アレ火山は、「煙草の山」と呼ばれ、深さ80メートルのカルデラ火口が形成されている。最近まで、世界的に希少な活動中の溶岩湖があったが、2017年1月に崩壊した。
〔当見聞きページ〕
（左）ハワイ島では、固化してガーゴイルのような形になった溶岩からマグマが流れ出している。
（右）コンゴにあるニラゴンゴ山の溶岩湖には、固化した溶岩の欠片が浮かんでいる。裂け目の下で赤光を放つ溶岩は、脅威を警告しているかのようだ。



ての山に挑む時、オリビエは、今までになり驚異的なイメージをとらえるため、火山現象の極端な多様性を表現しよう心がけている。その挑戦によって、グアテマラのサンチャギート火山では、不思議な環状の火山灰噴煙をとらえ、タンザニアのオルドイニョ・レンガイ火山では、オレンジ色に妖しく光る溶岩を狙い、南太平洋に浮かぶバヌアツのヤスール火山では、壮大な噴火の威力と迫力をカメラに収めた。巨大なガスの泡が破裂する衝撃波は、私たちを芯から震え上がらせる。ロシア極東の巨大な火山帯で、雪と火山灰に覆われた凍てつく山肌を一時だけ暖める溶岩噴泉の美しさを、あなたならどう伝えるだろうか。

その後、30年間で40の火山を制覇したが、オリビエの情熱は衰えない。自然を記録し伝えることは、私たちにとって、常にそれ自体が目的であり、凄まじい瞬間や強烈な感動を分かち合ってきた。

それと同じくらい重要なのは、自然保護活動に専念する人々や科学者と連携することだ。例えば、オリビエは、コンゴ民主共和国のゴマにある火山の巨大な噴火口のみから資金不足にあえぎながら活動する同国の火山学者たちを支援するため、ジュネーブの火山学会のメンバーと幾度となく現地を訪ねている。2010年、このチームは、地球最大の溶岩湖の縁を歩くという彼らの夢を実現させた。「足元でたぎる

マグマに見とれて、数分間、完全に現実から遊離していた。僕を見守るためにとどまっていたチームメイトの無線機から漏れてくるパチパチという雑音で、火山活動が差し迫っていることに気づき、現実を引き戻されたのです」と、彼は話す。

足元でたぎるマグマに見とれて、
数分間完全に現実から遊離していた。